

公益社団法人 日本農芸化学会

2017年度若手発案企画③

(報告者: 下村健司)

前日の雨があがったものの肌寒い季候の中、12月1日(金)に第4回天然物化学研究会を東京農業大学世田谷キャンパスの横井講堂で開催いたしました。

まず、東京農業大学生命科学部分子生命化学科の勝田亮先生は、「計算化学支援による天然物の合成と立体化学決定」について講演されました。生物活性を有する天然有機化合物の合成研究において、計算化学を用いた合理的な設計が可能であることや、合成した化合物もしくは単離された化合物の立体化学に関する情報を計算化学的に予測、確認することの可能性についてご紹介いただきました。

次に、富山県立大学工学部生物工学科の奥直也先生は、「モノが取れない時代の天然物化学サバイバル術」について講演されました。近年新規化合物を発見することが困難になりつつある、天然有機化合物の単離構造決定に関する研究において、富山のユニークな環境や、生物に着目した研究により、ユニークな化合物を発見した経緯などをご紹介いただきました。

最後に、東京工業大学理学院の宮永顕正先生は、「放線菌が生産するポリケタイド化合物のユニークな生合成マシナリー」について講演されました。マクロラクタム系天然物のピセニスタチンの生合成において、アラニンにあたかも保護基のようにして用いる、大変ユニークな生合成経路についてご紹介いただきました。また、エンテロシンの生合成にFavorskii型反応が存在するという独特な機構について紹介いただきました。

今回の研究会には約60名の方々にご参加いただき、様々な観点からの質疑が行われ、活発な議論が行われました。天然物化学というくくりの中に、多様なアプローチを用いて日々進歩する技術を用いた研究が大切であることを感じさせていただける内容でした。

研究会終了後には東京農業大学内にあるレストランすずしろにて参加者同士の懇親会が開催され、研究会では足りなかった時間を補うように議論が続きました。以上、若手の研究者の議論の場、そして交流の場を提供する有意義な会になりました。

末筆になりますが、ご講演いただきました講師の先生方、そして研究会の運営にご協力いただきましたスタッフ、本企画をご採択いただきました日本農芸化学会関東支部の皆様、ご後援いただきました日本化学会に厚く御礼申し上げます。

